



左からラグビーのブラウン健人マッシュー選手、水泳の上垣光選手、古畑海生選手。ワールドカップ、パラリンピック、オリンピックと目標は異なるが、「絶対に負けたくない!」と口を揃えた

次代の日本スポーツ界を牽引する 若手チャレンジャーのために、 スポーツチャレンジNEXTを新設。

スポーツ界の「縁の下の力持ち」を讃えるヤマハ発動機スポーツチャレンジ賞。その第6回奨励賞を受賞した東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会戦略広報部から、「未来のアスリートの育成に関わることに使っていただきたい」というメッセージとともに、賞金辞退の申し出があった。その200万円を原資として、スポーツチャレンジ助成に「スポーツチャレンジNEXT」が新設された。

その最初のNEXTチャレンジャーとなったのが、写真のブラウン健人マッシュー選手、上垣光選手、古畑海生選手。3人はこの年揃って高校に進学し、ラグビーワールドカップ、パラリンピック、オリンピックというそれぞれの目標に向けてチャレンジを開始した。

それに先立って参加したスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングでは、国内トップクラスのアスリートや幅広い分野の研究者と3日間寝食を共にし、「今まで感じたことのないような刺激を受けた」(古畑選手)、「グループワークでは、パラリンピックで金メダルを獲得という僕の目標を実現するために、一流の人たちが本気で考えてくれた。ドキドキしたし、ワクワクした」(上垣選手)と顔を紅潮させた。

マッシュー選手は20歳でラグビーワールドカップ日本開催を迎える。「その頃はきっと大学生。もちろんジャパンのセンターとして活躍するつもり」と目を輝かせ、21歳で東京2020オリンピック・パラリンピックを迎える上垣選手と古畑選手は「メダルを獲得」「必ず実現する」と力強く語った。3人はともに所属する高校で地力をつけ、着実な成長を遂げている。

競技は異なるものの、YMFSのプログラムを通じて交流が始まった未来を担う若者3人。互いの存在をどう思っているかと尋ねてみると、「仲間。そして絶対に負けたくないライバル!」と口を揃えた。

2015/2016 平成27年度

10月1日、文部科学省の外局としてスポーツ庁が設置され、鈴木大地氏が初代長官に就いた。イングランドで開催されたラグビーワールドカップでは、日本が強豪・南アフリカを破るなどグループリーグで3勝を挙げ世界を驚かせた。熊本では震度7の地震が発生し、犠牲者は160人を超えた。

スポーツチャレンジ助成事業

リオオリンピック・パラリンピックの選考イヤーにあたり、各チャレンジャーが目標に向かって全力を尽くした。その結果、オリンピックに選手2名、審判1名、コーチ1名、パラリンピックに8名の選手の出場が決定した。



■平成27年度(第9期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	47件	14件	1,368万2,800円
研究助成	54件	11件	1,015万500円
NEXT	5件	3件	150万円
奨学生	9件	4件	720万円(1年分)
計	115件	32件	3,253万3,300円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

36名のスクール生が通年型のセーリング指導に加え、伊豆大島外洋帆走訓練、浜名湖夏季合宿など自然・水辺体験プログラムに取り組んだ。また、2月にオーストラリアで開かれた国際交流レースにスクール生が参加した。



■セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

NPO法人静岡県セーリング連盟との共催で開催。全国34クラブから119名の選手が参加した。レーザー4.7級が世界選手権代表選考会を兼ねたほか、国内トップレベルの講師陣を招いての技術指導や勉強会で「学べるレガッタ」の色をさらに濃くした。



■スポーツ教材の提供

935件の申請があり、抽選会を経て120団体にスポーツ教材を提供した。また5年目となる東日本大震災被災地への支援では、65団体に教材を提供した。「指導サポート付きタグラグビー教材の提供」は2年目を迎え、ヤマハ発動機(株)の協力のもと9校に対して実施した。

■全国児童 水辺の風景画コンテスト

全国の689団体から8,763作品が寄せられた。これらの作品の中から、入選501作品、入賞37作品が決定した。



スポーツ文化・啓発事業

■第8回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞



[功労賞] 藤原 進一郎 氏
「すべての障がい者の生活にスポーツを——」
その信念を貫いた40年



[奨励賞] 中島 正太 氏
先端技術を駆使したデータ分析で、ラグビー日本代表の躍進に貢献

■調査研究

4年目となる障害者スポーツ分野から「障害者スポーツ選手発掘・育成システムのモデル構築に向けた基礎的調査研究」を、新たに「トップスポーツの現状と課題に関する研究—ラグビーフットボールに関する社会的認知と観戦行動の基礎調査—」に取り組み、両件の調査結果を報告書にまとめた。また、調査結果の社会活用促進を目的にシンポジウムを開催したほか、障害者スポーツの社会的認知向上を目的に、小・中学生を対象に障害者スポーツ(車椅子バスケットボール)体験イベントを初めて開催した。

